

# マイトーク MY TALK

## 第4号

発行：中央大学放送研究会OB会（会長／水上 虎馬雄）

住所：〒192-0351 東京都八王子市東中野742-1 中央大学放送研究会気付

発行日：平成10年7月1日



## 歩み続ける実り多き人生

梅雨の晴れ間の6月12日、JR東中野駅に近いご自宅に坂正夫さん（2期）をお訪ねし、放研創成期から今日までの数々のエピソードをお伺いしました。



実り多き人生を語る坂さん

### ◆八ヶ岳を前にアナウンサーを決意

あれは昭和二十七年の六月、私が三年の夏休みに入る直前でした。たまたま学生課に「放送研究会企画委員募集・水上」と書いた紙が掲示されていたんです。当時、私は結構真面目で八人ぐらいの勉強仲間を作っていたのですが、その中から私と三ツ橋くん、小柳くんが応募して、それが水上さんとの出会いでしたね。

その夏は、就職には三年の成績が鍵を握るとされていたので、勉強仲間で信州の佐久にある貞祥寺に

七、八月と合宿しました。後で知ったのですが、そこは島崎藤村も居たことがあるという由緒ある寺でしたよ。司法試験や外交官試験を受ける者もいたりして、みんな一生懸命勉強しました。私も事前に多くの本を送ったのですが、水上さんと会ってから、どうもアナウンサーのことが心に引っかかっていました。青春の夏の日々を寺の前に広がる八ヶ岳を見て過ごすうちに、だんだん「アナウンサーになろう」という気持ちが高まってきたのです。

### ◆森清法学部長に初代会長を依頼

夏休みが終わって、いよいよ水上さんの指導の下に“会の形”を整えることになり、会長は、法学部長森清教授にお願いすることになりました。浦和のご自宅にお伺いすると、「四書五経の中にもマスキュニケーションが重要だという意味のことが書いてある。しっかりやりなさい」と、快くお引き受け戴くことができました。この言葉は、今日に至るまで妙に印象に残っていますよ。

会の組織では、劇団部は近藤くんや桃川くんがしっかりやっているから、私はアナウンス部に専念することにになり、水上さんの指示で、当時、放送界で活躍している先輩アナウンサーを訪ね歩きました。NHKでは人気番組「二十の扉」の長島金吾アナ、「民謡を訪ねて」の小沢寅三アナ、東京オリンピック開会式で『日本中の青空が集まったような』と名放送をしたスポーツアナの北出清五郎氏、民放ではラジオ東京（現TBS）のアナウンス部長の渡辺仁三氏など、いずれの方もお会いして会の主旨を説明すると、大変積極的に応援して下さいましたね。

## ◆放研が取り持つ生涯の伴侶

私の記憶も当てにならないので、同期で毎日放送に行った藤本くんが電話して確かめたんですが、当時は会室も無くて空いている教室で発声練習をします。それに、アナウンサーの模擬ペーパーテストまでやったらいいのですが、このことは残念ながらほとんど覚えておりませんね。

また、技術指導をして戴いていた植松さんのはからいで、電電公社（現NTT）から東通工（現SONY）製のテープレコーダーを借り、テープも高く買えないから、ラジオ東京で使用済みの切れ切れのテープを買ってきて、スプラインシングテープで繋いで使うような状態でした。

そのうちに仲間もだんだん増えてきて、その中に一年生で友松くんという、後の私の女房がいたので。私は、入会テストで『彼女は訛りがあるから落とす』と言ったんですが、他の人たちが推して合格になりました。考えて見れば、あの時に落ちていたら、私の女房にはならなかったでしょうね。

## ◆思い出に残るスポーツ録音構成

当時、中央大学はスポーツの各分野に有力選手を輩出していました。そこで、これらの選手にインタビューして録音構成を制作しようということになり、藤本くんがナレーション、私がインタビュを担当しました。相撲の高須選手、レスリングの石井コーチと笹原選手、フェンシングの白井選手など、錚々たるメンバーがインタビュに協力して戴いたことを憶えています。

藤本くんの話では、この録音構成が白門祭の時に

どこかの教室で流されているのを聞いたとのことですが、自分の声を耳にしてがっくりしたそうです。彼は、当時のNHKで硬派のナレーションで定評のあった松野アナに傾倒し、事実、非常にうまくいったのですが、その時の再生音が悪くて、まるでお化けのような声”だったと語っていましたよ。

## ◆NHKに惜敗しニッポン放送へ

翌年、いよいよ満を持してNHKを受験しました。長島先輩にも「NHKに入ってニュースをやれ」と期待され、順調に試験を進んで行ったのですが、最後の面接で不合格になったのです。ちょうど体調を崩し痩せ細っていたこともあり、後で「病的な美声」だと言われましたよ。

そんなわけで自慢の鼻を折られたのですが、長島先輩の励ましでニッポン放送を受験し、今度は無事合格することができました。ニッポン放送の開局が昭和二十九年七月十五日、第一声は朝五時半のニュースで、担当はNHKからアナウンス室長でこられた舞台中継の名アナ高橋博氏でした。その後が新人の私が受け持つ番組で、これは生ではなく録音だったのですが、前の晩、ひどくトチってしまい徹夜になってしまいました。これもNHKからきたディレクターが非常に私を力づけてくれて、二人で局から出てお堀の回りを歩いては、スタジオに戻ってなんとか録音を済ませたのが印象に残っています。

## ◆開局当初のフジテレビを兼務

その後、夕方六時半のニュースを担当したりするうちに、昭和三十三年秋に子会社のフジテレビが開局になり、一年ばかり兼務出向しました。舞台中継

が多く、歌舞伎の「勸進帖」「世話情浮名横櫛」どの解説や、女剣劇の浅香光代さんにもインタビューしました。結局のところ、私はラジオアナと、居残ったんですが、テレビ映りの問題もあった、しょうかね。

そのうちに、急速にテレビの力が強くなつて、ラジオもなんとかしなくてはと、朝、ヘリターを飛ばしたり、文化放送とステレオ放送を、たり、サテライトスタジオを設置したり、いろいろ工夫しました。その決定打が、若者の社会現象になったオールナイトニッポンでしたね。

## ◆歌謡番組担当からスタジオ事業

私は、その頃、アナウンサーのデスクをやりましたが、月、金のベルトで夕方四時四十分か、時間の生番組「日本縦断歌謡プレゼント」を担当することになりました。美空ひばり、石原祐次郎、橋美智也、春日八郎、フランク永井、三波春夫などの時期の歌謡曲ビッグ歌手は、ほとんどお会っています。

その後、この歌謡曲を生み出す音楽スタジオの答申責任者に任せられ、世界最高の水準を「一口坂スタジオ」の設立となりました。

平成二年に、通産省に全国四十九社が参加する「社団法人日本スタジオ協会」を認可戴き専務になりましたが、部厚い申請書を同業者の協力一人で作成したのも、私の人生の大きな思い出です。

## ◆クレイジーな人が時代を創る

私は、根がアナウンサーですから、今年の一〇十日に、ニッポン放送の一期から二十期までに

かけて「LFアナウンサーの会」を立ち上げ、一期生ということで会長になりました。思い出の有楽町旧社屋に約六十名が集まり、中には四十年ぶりにお会いする方もあって楽しい時を過ごしました。

考えてみれば、放研を作って、アナウンサーになって、音楽事業に携わって、協会を設立して、LFアナのOB会を立ち上げて、休む間もなく人生を過ごしてきました。苦しいことも多かつたけれど、水さんがいて今日の放研があるように、芯になって突っ込んで行くような「クレージー」な人がいないと新しいものはできないのだと思います。私もクレージーにいろいろやってきたけれど、そろそろ疲れたので引っ込もうかと考えています。でも、回りの人たちは「坂さん、きつとまた出てくるよ」と笑っていますからね。

(インタビュアー 金野)

## メモランダム

浅草生まれで三代続いた生っ粋の江戸っ子の坂さんは、歯切れいい張りのある声で思い出を語られます。同期の方に確認されたり、話す内容を九ページも用意されたり、何事にも全力を尽くされるお人柄に敬服させられます。

この春、少し足を痛められ、五月に予定していた能子夫人(4期)とのフランス旅行を中止されたとのこと。お二人の仲睦まじいご様子は、坂さんの人生に放研が深く結び付いていることが実感させられました。

## 創立四十五周年記念式典

### 第二回OB会定例総会準備完了

今世紀最後の周年記念行事と定例総会は、これまでにご連絡したとおり七月二十五日に東京新宿の京王プラザホテルで開催されます。既に、首都圏をはじめとし、全国各地のOB各位から参加のご返事が六月末現在で百六十通にもなり、当日の飛び入りも含めると二百人には達しそうな勢いです。これに現役の参加を加えると、かなり盛大な記念式典になるものと思われ、実行委員も万端怠りのないように準備に励んでいます。

#### 【日程・会場】

◇開催日時 平成十年七月二十五日(土)

午後三時三十分～六時三十分

第一部 「第二回定例総会」

第二部 「創立四十五周年記念式典」

◇開催会場 京王プラザホテル(東京新宿)

#### 【記念事業】

◇OB会インターネットホームページ制作

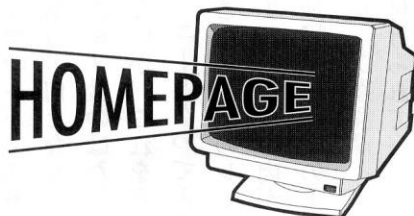
◇マイトーク記念号発刊(カラー8ページ)

当日は、午後三時三十分から四階「花」で定例総会を実施、四時三十分から五階「コンコルドボールルーム」で記念式典を開催します。パーティーは日本テレビアナウンサー吉田慎一郎氏(17期)の司会で進行しますが、皆さんの久

しぶりの邂逅の妨げにならないように歓談の時間を多く取りました。二十世紀の貴重な機会を多くの人々と精いっぱい語り合って戴き、最後は「惜別の歌」で来るべき二十一世紀に繋げたいと考えています。

#### ■創立五周年記念発表会プログラム発見

昭和三十二年六月二十九日、中央大学放送研究会創立五周年記念研究発表会が新宿文化会館で開催されました。記録には残っていても、その実態がつかめなかつたのですが、当日のプログラムを仙台市にお住まいの佐久間さん(6期)が保存しておられました。時代を感じさせる三つ折のプログラムには、録音構成「青年学級と教育放送」、放送劇「落した珠束」などと共に、西沢実氏(当時NHKライター)の「マナコについて」、那須宗一氏(当時文学部教授・会顧問)の「マス・コミに於ける放送の特種性」という講演もあり、創成期の放研が一途に放送文化を追い求めていた様子が伺われます。



# ACCRETIVITY

## みちのく飲食三昧記

仙台市 6期 佐久間良平

平成九年七月五日、朝七時に八戸駅で前泊の黒沢氏と小生、十和田市からマイクロバスを駆つた立崎氏、そして東京から寝台車に揺られた水上会長一行十二名が合流し、いよいよ総勢十五名の「みちのくシリーズ」がスタートした。

朝食の食堂「小ヶ政」は早朝ながら立崎氏の手配よろしきを得て豪華な弁当が準備してあった。刺身の海老が特に良かったがとにかく量が多い。お作り、揚げ物、煮物と、これをもしもお膳に並べれば宴会料理、ビールの三本位はたちまちいける。しかも特別にイカ素麺を注文してあった。

その後、海猫で有名な蕪島を見学し、八食センターで酒の肴を購入。水上会長と八戸の地酒「桃川」を試飲するうちに、何時の間にかバスは小雨の中を奥入瀬溪谷に入つていった。

溪流と名のある滝と肴にし

奥入瀬は水かさが増し 五月間

立崎氏の滝の名解説付で初夏の緑の中を進み、標高四百一米、十和田湖に着いた。

昼食は休屋の「シーサイドホテル」が予約済みであった。すでにお膳が並べられおり火が付けられた。ビールはアサヒのスーパードライで爽やかに喉を通した。支配人と言うか番頭と言うべきかが料理の解説をした。比内鶏の陶盤焼、当店オリジナルのりんごのおこわとか。が、しかし何と言つても圧巻は



田沢湖をバックに記念撮影

立崎氏がどう手配したか「姫鱈」の塩焼きが出たことである。今時まぼろしの魚であり、しかもこれ程の大きいのを食したことがない。

姫鱈よ、これから食うぞ覚悟せよ

がぶりと齧ると魚肉はこれぞ本物のサーモンピンク色、湖の中を十分に泳ぎ、たっぷり栄養を取り、芳醇なる水の精を美味なる魚味と化して、今、口の中で芳味を放出している。

十和田湖に感謝をしつつ 鱈を食う

ここで五戸町の冷酒「菊駒」で口をさっぱりさせる。この酒も実に塩焼きにぴったりで、端麗できりとして、誠に相性がよろしいのである。

姫鱈と虹鱈の刺身も良かったし、陶盤焼の鶏肉舞茸、キリタンポなどすべてが旨いが、塩焼きの匹ですっかり堪能した。

一滴も飲まない立崎氏がバスを霧雨の中、慎重運転をし、山道を下り「康楽館」を経て秋田県鷹町「大太鼓の館」に。

康楽館 見ることもなく 旅疲れ

大太鼓 ビデオで鳴らす 撥さばき

米代川は梅雨を集めて濁流と化し日本海へと急いでいる。湯瀬溪谷を進み黒沢氏手配の湯瀬温泉「の湯ホテル」に着いた。ロビーで幹事の林氏より屋割り発表があり、一夜の宿に落ち着いた。

道路から 見下ろしていた 宿に着き

六時半から宴会、林幹事の進行で水上会長の挨拶桃川氏がグラスを乾し「さあ行くか」と開始した。酒は、両関の生酒のホテルブランド「吉祥」でらりとし過ぎていくようである。何となく生酒独の頼り無さと最初感じた。グルメ盆のはたはた寿といつてもほんの一箸しかないが、これを食する。「吉祥」が何と絶妙のハーモニーとなって舌を刺す。いや喉のほうか。そこで比内鶏のレモンメ、試して見ると、身の引き締まった地鶏の肉が生ききとした歯ごたえで実に心地よく、何時のまにかみ込んでしまった。

キリタンポのなべに火が付けられて室温が上昇した。ビールの出番で、これもスーパードライで大に結構。和牛の冷やしステーキはこんな物か。鍋、出来上がるうちに「はたはたの田楽」に箸を付けた。ぷりぷりの卵も入っているが何か今イチの感。はたはたは 真冬が旬か 初夏の宿

は驚いた。「キリタンポにはねえ…あれとこれを入れて」などと講釈しつつ、徳利の欄をした両関も飲む。もうこの辺になると結構腹に収まっているので酪酊している。『とんぶり』の味などまるでゼロになっている。

吸い物の土瓶蒸しが登場した。何が入っているかなと期待した。舞茸が箸に抵抗した。成程、ここで舞茸を使用したのかと納得した。一口すすってみる。茸の味だけで舌がすっかり麻痺している。本当は比内鶏も入っている筈なのだ。

八時半過ぎに幹事の部屋に集合し爽やかに二次会。

## 中国で日本語を教える

福岡市 7期 杉山祥子

平成四年以来、夫婦で、中国上海の華東師範大学外国語学部で日本語教育に当って参りましたが、この程、その任を終え日本に帰って参りました。思えば六年前、RKB毎日放送（二人とも同局のアナウンサー）の卒業を待たず新天地に飛び込む私どもに皆様から暖かい激励をいただき、それを励みに二人三脚、当初精々一年、よくて三年か、と思っておりましたが、満六年という年月を過ごしてしまいました。それだけ中国の若い世代との触れ合いは、楽しく魅力あるものでした。

日々変貌を見せる中国、その中でも経済を中心に日常生活に於いても東西の国々から入り込む事物に振り回される上海、その上海で送る大学生活、その後に来る就職、学生達も悩み迷っています。

そんな中で夢や希望を、笑顔で、涙で話してくれるようになったのも、六年という年月があったから

終了し、温泉に浸かり十時にはもう高野であった。

翌六日、雨は上がった。ホテルで結構なバイキング朝食をいただき、昨日と同じく立崎氏のハンドルで鹿角八幡平ICより東北道に入り一路南下。途中岩手山SAで休憩。

啄木が眺めし山の下にいる

盛岡ICで東北道と別れ四十六号経由で田沢湖に着き、昼食は「共栄パレス」の二階に案内される。またまたキリタンポ鍋で、この鍋には春菊が使われている。鶏とごぼうと舞茸の相性からして、ここはセリにして欲しいものだ。しかし、今回の旅では

でしょう。この事は、私どもにとって、単に第二の人生という以上の感激的な体験を積むことができたように思います。

RKB毎日で培った三十余年のお互いの経験を生かして、聞き取り教材のテープ録音、パソコン、ワープロを使つての教材作り、授業方法で議論、反省を重ねた日々、そして下学期が始まっている教室が、一人一人の顔が、今しきりに浮かんできます。

送り出した学生の数も増えて、日本留学している教え子も両手に余るほどになり、教え子達から東京で、大阪でと同窓会の誘いも来るようになりました。二人とも初めての教師という経験でしたが、何物にも代え難い財産だと思っています。

上海市でも最高のものといわれる「白玉蘭奨」を受けたり、出版社の依頼で日本語学習者のためのテキスト作成に協力し、スタジオで二人並んでマイクに向かい三冊の本も残せました。

今年二月に帰国して、現在充電中というところですが、中国の卒業期の六月を前に、学生達との約束を果たすべく華東師大に行き、懐かしい顔々に再会

もコシがある。二本分のキリタンポと、お汁っぱいの稲庭うどんを食べ満腹。

湖を半周して辰子像に着いた。

恥じらいを水面に映し辰子姫

午前に通った仙岩トンネルを逆行し「岩手手作り村」を散策後、繋温泉街を通つて盛岡駅へ。六時十分発の新幹線で、駅弁の「はらこ飯」を賞味しつつ今回の実に有意義な旅が終わった。

※紙面の都合により約半分はダイジェストさせて戴きましたのでご了承下さい。

してきたりしています。

ささやかな経験ではありますが、何か皆様のお役に立つ事があれば幸いです。



自宅を開放して課外授業（左端が杉山さん）

# AGILITY

現役アクティビティ

## 放送研究会前期活動報告

中央大学放送研究会 O B 担当三年 太田きよみ

梅雨明けを思わせる暑い陽差しが続く時期になり、新入生にも放送研究会員という自覚が芽生え始めたようです。

新会員登録者八十三名、うち実質来室者約五十名、二年生二十一名、三年生十四名、四年生十三名、計一〇三名が九八年度放送研究会の顔です。実際に活動を行なっているのは三年生以下で、四年生は、引退した今、自分の時間に重点を置いてい過ごしているようです。

前期の活動としては、入学式、五月の合宿をピークに、新入生勧誘歓迎活動に主に力が注がれました。新入生への放研紹介の場ともなります、春の番組発表会は四月二十九日、中大にて行なわれ、他大生、新入生、卒業生を中心に多くの方に足を運んで頂きました。また、昨年から開催されている「DJ職人」と題された、アナウンス部と技術部主催のDJをメインとする発表会があり、その第一回目の七月五日には八組のDJが出場しました。

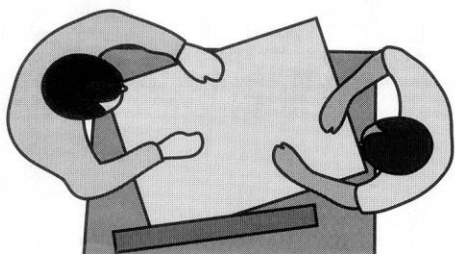
五月下旬より、各部ゼミも始まりました。今年は中大の夏休みが全学部共通して七月三十日～九月十九日になったため、一年生は七月上旬まで上級生の指導を受けることになり、時間に追われない着実なゼミができたようです。

夏休みの活動は例年通り、夏合宿以外は各自、各

部での活動となります。今年の夏合宿は、長野県の戸狩温泉にて三泊四日で行なわれる予定で、主に十月の学園祭の会議や全学年参加のスポーツ大会をすることになっていきます。合宿には、四年生も参加する予定なので昨年に続き、就職活動報告の場も持たれそうです。

四年生の七月一日現在の就職状況は、全十三名のうち内定をもらった者三名、公認会計士や公務員、教員など勉強中の者三名、他は未定となっております。マスコミ関係の内定者は二名程おり、一名はNHKアナウンサーとして、もう一名は映像作家としてその活躍を期待されています。現在、就職活動を続けている中にも、マスコミに絞って活動している者も数名おり、就職協定が無くなったことからスラッ姿でいる期間も長びきそうです。

以上、活動報告と就職活動状況でした。



## セピアのアルバム

### ドラマ・ア・ラ・カルト事件

これは貴重な一枚の歴史です。佐久間さん（6期）からお借りした文字どおりセピアの写真の裏面には、昭和三十二年五月十二日新入生歓迎会と記されています。

この日、放研は新入生を歓迎して講堂で「ドラマ・ア・ラ・カルト」を講演し好評の内に終了しました。しかし、続いて当時のラジオ東京の人気番組「希望音楽会」の公開録音を始めたところ、不謹慎な野次の攻撃で収録は中止となってしまったのです。これにより放研の責任問題となり、大放連脱退などが検討され会内が混乱しましたが、結局は会に直接の責任はないという結論に至りました。



この後に公録中止事件が

# NHKアナウンサー誕生!

## アナウンスセミナーの話

千葉県 17期 川口 稔



中央大学の全学生を対象にアナウンサー志望者を募ったところ二週間で多数の履歴書が集まった。それを選考し、更に五時間もかけ面接試験を行ないふりにかけ男子十名女子十名を選びアナウンスセミナーが始まった。

このセミナーを始めたきっかけは昨年八月ゴルフ場に向かう車の中で同期の日本テレビ吉田慎一郎君が「中大卒のアナウンサーを誕生させよう」と言ったことからである。彼の所へは毎年アナウンサー志望の放研の後輩が教えを乞うてたつて来る。しかしここ何年間一人のアナウンサーも生まれていない。中には教えを受け放しでその後の入社試験の結果を報告しない者もいる。そんな苛立ちが蓄積していたのかも知れない。吉田君の話では二十一世紀に入るとテレビのキー局はどこも衛星放送を二波ずつ持つようになりアナウンサーの需要が増す。当分の間はアナウンサーを目指す者にとって好機である。自分が後輩を教えられるのもせいぜいあと十年。母校への貢献を考え放研という枠をはずし中央大学全体という視野でアナウンサーを育てろというなら喜んで力を尽くすと言う。アナウンサーは今や花形職業であり、或る大学では学校の宣伝になるからと局アナ育成に本腰を入れている。中大にとっても必ずプラスになる筈である。彼の母校に対する純粋な思いと

後進を育てようとする熱意に共鳴し出来る限りの協力を約束した。とは言えアナウンサーとなれば競争率千倍を越す程の難関。年明け早々に行なわれる民放の入社試験には時間が足りないが兎に角第一歩を踏み出そうと水上先生に相談すると賛同されすぐに大学に話を持ち掛けてくれた。無論大学としても大歓迎で、中大出身のアナは何人かいるが多忙な身でこの様な試みをしてくれるのは初めてと、以前からある就職部の「マスコミセミナー」の特別講座として「アナウンサーセミナー」を設けた。大学公認の講師であれば一回三万円程度の謝礼が出るからと強く勧められたが吉田君は固辞し、その代わり日程は彼に合わせ週一回二時間の講座を開くこととなった。

十月中旬第一回のセミナーを御茶ノ水の記念館で開催した。「目標は一つ、プロのアナウンサーになること。そして見事アナウンサーになれたら機会を捉えて母校中央大学をPRすること」吉田君はそう言い受講に当たっての心構え、スケジュール、練習方法等を教え出した。初めの頃、学生達はこのセミナーを大学が当り前にやっている講座だと思っていたらしく、宿題を忘れたり前回の講義内容を全く覚えていなかったり甘えた態度を見せていた。そこで緊張感を持たせるため毎回成績の劣るものを落として



行き、最終的には男子六名女子八名の計十四名に絞ってセミナーを続けた。勿論放研の後輩もこの中に含まれていた。回を追うごとに各人の個性が育てられ磨かれていった。当初発声が弱く心配になる子が毎日の発声練習を地道に続ける間に、見違えるほど前に声が出るようになった。神宮球場での大学野球を見ながらの実況訓練では不慣れで泣き出す女子が居たり、逆に野球音痴を予習で克服しキチンとルールを覚えて上手にこなす子もいた。アパートに下宿

している子は毎晩大声で新聞を読むので周囲から変人扱いされ出したと言う。女子の一人はアナウンサーセミナーの事を母親に話していないと言う。なぜなら母は早合点で口が軽くセミナーのことを知ったから親戚中に女子アナになったかのように吹聴されるからだと言って皆に笑われていた。

吉田君の厳しく、しかし豊富な経験を元にした説得力ある指導はその後八回行なわれた。八王子の校舎と御茶ノ水の記念館を何度も行き来した。始めた頃半袖シャツで十分だった陽気が、いつの間にかコートを着ても寒く感じる頃となった。

十二月十九日、セミナーは最終の日を迎えた。

テレビ局入社試験を同じ要領でビデオを持ち込み三分間トークのカメラテスト等を行なった。皆の熱気がレンズを通して伝わってくる。

全ての講座を終了し、夜のタクシーに分乗し放研11期の河合先輩の店で打上げ会を催した。日頃から河合さんにはお世話になっているがこの日も学生全員は只というサービスを受けた。セミナー開催中常に応援して頂いた水上先生が同じ中大常任理事の濱田先生、そして濱田先生がゼミの教え子であるNHKアナウンサーの山本哲也君（おはよう日本”スポーツキャスター”）を連れて来られた。濱田先生は「司法試験を目指す自分のゼミの子とは違い、ここにいる子達は目が明るく輝いている」と言っておき、ここでも河合先生は「同じ中大卒として精一杯応援するのだから何でも相談してほしい」と言った。テレビ朝日の要職にある14期の早河先輩が忙しい中駆けつけ「アナウンサー受験の心得」を話して下さった。セミナー当初から手伝ってくれた昨年の就職部「マスコミセミナー」の出身者で今年テレビ朝日にアナウンサー

として入社した小木逸平君も出席し、勤務先の先輩となる早河さんの前で小さくなっていった。

学生達が一人一人セミナーの感想とお礼の言葉を述べた。一人の男子が最後に次のように話した。「三ヶ月という短い間で同じ目的を持つ友と巡り合い学んだ日々を忘れません。打上げ会でもマスコミで活躍される方々から貴重なアドバイスを受け感激で一杯です。この中から一人でもアナウンサーを誕生させることが唯一の恩返しと考え頑張りま

す」  
教える内に教えられることも多かった。私はこの店に来る時、分乗したタクシーの中での事を思い出していた。雑談の最中のカーラジオから岡村孝子の「夢をあきらめないで」の曲が流れて来た。♪あゝあなたの夢を、あきらめないで♪ その歌詞を聞いていた女子が「今の私達みたいネ」とポツリと言った。私のすぐそばに青春がある。そんな気がした。彼らはその後、就職戦線へ向かって走り出して行った。

それから半年。

十四名の中から三名の局アナが誕生した。CBC（中部日本放送）、さくらんぼテレビ（同期の山内君が強力な後押しをしてくれた）、そして見事NHKに放研の現役男子が合格した。中大出身でアナウンサーとしてNHKに受かったのは十八年ぶり、何と打上げ会に来てくれた山本哲也君以来のことだったという。

我々十七期の卒業から丸三十年が経った。確実に若い芽が育っているのを心から嬉しく思っている。

#### 平成9年度 中央大学放送研究会OB会決算書

収入の部		会費	401,550
	前年度繰越金		2,510,325
	合計		2,911,875
支出の部			
会議費		177,500	
通信費		184,060	
事務費		5,197	
印刷代		307,150	
慶弔費		30,000	
その他		10,000	
	次年度繰越金		2,197,968
	合計		2,911,875

会費は67人

平成10年7月11日

会計 齋藤 進 (5期)  
河合昭次郎 (11期)

#### 編集後記

マイトーク第四号をお届けします。

放研OB会四十五周年式典の開催も二週間後に迫っております。皆様と再会出来ることを心待ちにしております。

六月三十日現在のご出席のハガキは一五〇枚程、来ており、この調子ですと、五年前の四十周年の時と同程度の人数になると思われ盛大な宴となりそうです。

早いもので、私共が幹事会を引き継いでから、あつという間に、任期があと僅かとなってしまいました。マイトークを始め名簿の整理等（発行は若干遅れておりますが）OB諸氏のご強力がなければ出来ない仕事でした。

今後共、後に続く幹事会に於いても多大なるご支援をお願いいたします。

幹事会一同